

5月4日、和歌山県高野町西細川地区・旧西細川小学校で毎月第一土曜日に開催されている「和紙の会」に参加させていただきました。ここでは、飯野尚子氏が「高野紙」の伝統技術を守り伝える活動をされています。

*「高野紙」とは

「高野紙」の伝統は古く、すでに平安時代の頃から紙漉きが行われていたといえます。「高野紙」は力強い紙として、次第紙や、傘紙、障子紙などに用いられました。また、ユネスコの無形文化遺産「細川紙」（埼玉県）のルーツは「高野紙」にあったとされます。



<旧西細川小学校・入口>



<中坊氏より受け継いだ漉き槽>
修理をされながら、大切に使われている。

古い伝統をもつ「高野紙」の生産は明治半ばころに最盛期を迎えますが、次第に需要が減少、衰退していつてしまいます。そして、昭和の終わりごろ、中坊君子氏、中坊佳代子氏を最後に途絶えたものとされています。そのような状況の中、飯野尚子氏は十余年前に、中坊氏の下で紙漉きを学び、技術を磨いてこられました。飯野氏によって、「高野紙」の伝統技術、さらに中坊氏から受け継いだ漉き槽などの道具類がいまも途絶えることなく続き、昔ながらの道具と方法で「高野紙」が作り続けられています。

そして、飯野氏は高野町の旧西細川小学校で月に一度「和紙の会」を開き、参加者と共に紙漉きの研究を続けています。ここでは、地域の人たちの協力のもと原料・道具づくりから、紙作り、消費における地産地消の循環が地元で成立しています。「和紙の会」では、原料の処理から紙漉きまで、だれでも自由に体験できるということで、私も修復本科の皆さんと一緒に「和紙の会」に参加をさせていただきました。

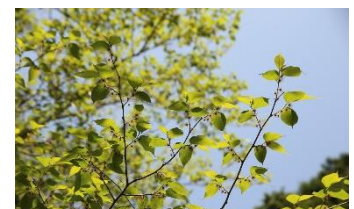
*「和紙の会」での「高野紙」制作の技術体験

高野紙のできるまでの工程は

- ①楮を採取する→②楮を蒸す→③楮の黒皮を取る→
- ④その楮を煮る→⑤繊維を柔らかくした楮を叩きほぐす→
- ⑥漉く→⑦天日で干す

という工程になります。

今回は③と⑤～⑦の工程を体験させていただきました。



<楮の花>

紀伊細川駅の周辺で楮の花が咲いていました。

<材料となる楮>



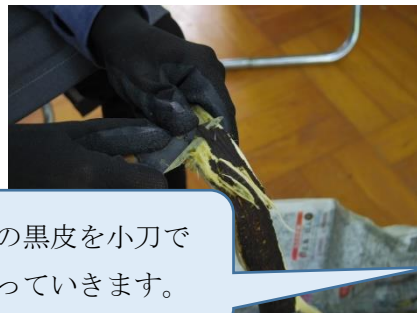
(↑日高川町産の楮)



(↑細川地区の野生の楮)

乾燥させて保管しています。

<工程③>



楮の黒皮を小刀で取っていきます。

<工程⑤>



木槌を使ってしっかりと楮を叩きほぐします。

楮

<工程⑥>~<工程⑦>



高野山のススキ。このススキを使って「萱簀」を作る。

「萱簀」はススキをすだれ状に編んだものを使用。大きさはA3くらいで小さめ。

完成した「高野紙」は厚みのある硬い和紙で、大きさもA3サイズくらいと比較的小さめです。

出来上がった「高野紙」で版画刷りをやらせていただくと、インクがのりにくいという特徴がありました。昔は、丈夫で硬い「高野紙」は傘紙などに使われていたといいますが、出来上がった「高野紙」を使ってみると、その理由がとてもよく分かりました。

原料・道具作りから消費まですべて地元で成立している「高野紙」。今回はその一部を体験させていただきました。

一度は技術が途絶える危機に瀕した「高野紙」ですが、飯野氏の活動によって、「高野紙」の技術はつながっています。これからの未来も、「高野紙」の技術がつながってほしいです。



天日干し